

# 日本医療機能評価機構

日本医療機能評価機構は、国民の健康と福祉の向上に寄与することを目的とし、中立的・科学的な第三者機関として医療の質の向上と信頼できる医療の確保に関する事業を行う公益財団法人です。

## 認定病院の 改善事例紹介 シリーズ

Improve

Vol.3  
一般病院2

### 紹介事例

国立大学法人

信州大学医学部附属病院

—自発的な内部監査によって病院全体の質向上—

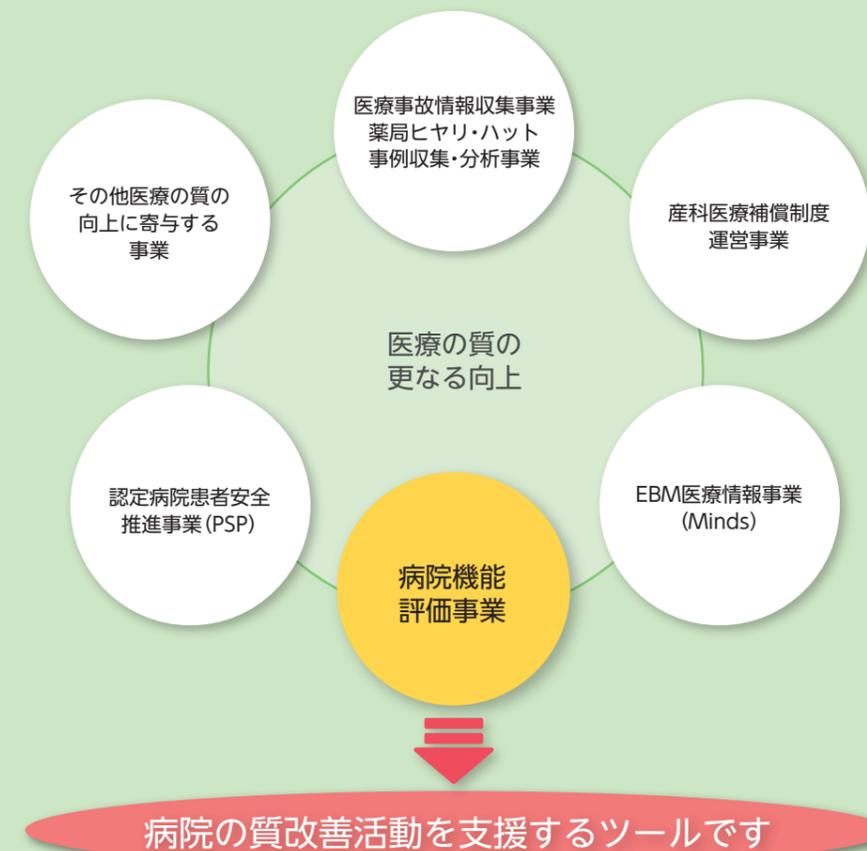
医療を見つめる第三者の目。

それが病院機能評価です。



公益財団法人 日本医療機能評価機構  
Japan Council for Quality Health Care

<http://www.jcqhc.or.jp/>



病院機能評価は、患者さんが安心して安全な医療を受けることができるように「病院の改善」を支援する仕組みです。サーベイヤーと呼ばれる専門調査者が病院を訪問し、病院の取り組みを評価します。病院外部の第三者機関による評価を上手く活用することで、これまで院内では気付くことができなかった課題や強みなどを明らかにすることができます。

評価の結果、一定の水準を満たしていれば「認定病院」となります。評価を受けることで明らかになった課題を改善し、認定を更新していくことで、継続的な質改善活動を行うことができます。

評価は、病院の特性に応じた6つの機能ごとに行われます。



第3号では『一般病院2』版の病院機能評価を活用して改善に取り組んだ事例を紹介します。

# 国立大学法人 信州大学医学部附属病院の場合…

病院機能評価を応用した独自の内部監査というアプローチで改善活動を継続している—  
信州大学医学部附属病院の事例を紹介します。



## 5年経過…またゼロから 準備する病院機能評価

「なぜまたこんなに大変な思いをしなければならないのか？今後も受審のたびに準備に追われるのだろうか？」

信州大学医学部附属病院は、今回で4度目の病院機能評価受審であり、これまで3回の受審で段階的に質は向上してきた。しかし、病院機能評価を機に行った改善活動を日常的に続けていくまでには至らなかった。

## 維持することの難しさ… 改善だけが全てではない

教育、研究を含め、高度医療を提供している大学病院だからこそ求められる質の維持は並大抵のことではなかった。初めての受審の時に力をかけて改善し、大きく飛躍した部分については、そのレベルを下回らないよう15年間保ち続けてきた。

「長い間教育してきて、「これから！」という人たちが外の病院に出て行ってしまふのは非常に残念です。しっかりと教育された人材が輩出されることで地域に貢献できることは良いのですが、人の循環が激しいので、高いレベルを保っていくことが大変です。」（臨床検査部技師長）

そのような「大学病院であるがゆえの課題」がある一方で、「大学病院ならではの強み」もある。その強みを活かして高いレベルを継続的に維持した結果、臨床検査部門や画像診断、病理診断など多くの部門でS評価を取得することができた。

## 維持、継続のための“内部監査” というツール

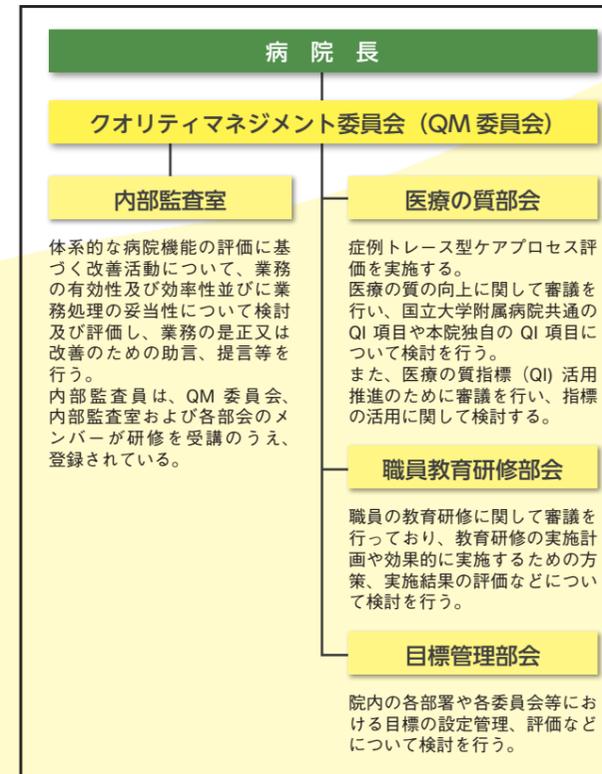
「継続的に改善すること」と「維持すること」の重要性を改めて感じ、院内全体で「ここをこうすればもっと良くなる」という意識を定着させていくために、病院機能評価で培った改善の文化をシステムとして残そうと院長は考えた。

そこで、受審から半年後の2014年6月に、病院の特定研究員の協力を得て、院内にクオリティマネジメント委員会（QM委員会）を設置し、2014年度はまず病院機能評価で指摘された項目を中心に、各部門の改善状況を確認した。また、内部監査の手法として、各被監査部署のチェックリスト（内部監査員が作成）を活用した評価および「症例トレース型ケアプロセス評価」を取り入れた。内部監査室のメンバーが監査員となり、2014年度は1病棟を対象に監査を行った。

「病院機能評価の受審の時は、実際に自分たちの病棟が受けているわけではないので、他人事というか…やはり自分たちの病棟が内部監査を受けた時は全て自分たちのこととして真剣に取り組みますので、変わったこと、得られたことも多かったです。」（内部監査を受けた病棟の看護師長）



クオリティマネジメント委員会(QM委員会)機構図



内部監査のケアプロセス評価は公開で行っているの  
で、別の病棟や部署の人たちも見に来ることができる。

「他病棟の関係者から、自分たちのチーム医療を評価していただける機会というのはなかなかないので、とても意欲が高まりました。」（内部監査を受けた療法士）

「内部監査を受けている病棟以外の職員も、横とのつながりや改善への意欲を感じ取って自分の病棟や部署に持ち帰ってほしいなと思います。」（内部監査員の医療情報部長）

2015年度以降は半期に2病棟ずつを回っていく。5年後の更新審査までに全ての病棟で内部監査を実施し、徐々に院内全体で改善活動の文化が醸成されていくよう計画されている。



## 職員全員で病院を 良くしていけるように

現在の内部監査員は管理職がほとんどであるが、今後は内部監査ができる職員を増やし、院内に内部監査の目を広げていきたいという。

「内部監査をすることで、“病院を良くすることに自分も関わることができるんだ”という気持ちになれることが重要だと思います。これからは、ある一つの部署、ある一つの診療科だけでなく、病院全体で“質を上げる”ということを考えていかなければならないと思います。」（院長）

「現在は診療・ケアのプロセス評価しか行っていませんが、例えば災害時の対応や緊急時の対応など、病院の機能に関わる本質的な側面についても、ケアプロセスと同じ手法を取り入れて改善していきたいと思っています。」（危機管理担当副院長）

「自分で課題を見つけてそれに対する改善策を考えられるようになるために、もっと多くの職員に内部監査の視点をもってほしいと思います。そういう視点が職員全体に広がることで院内全体が良くなっていくと思います。」（総務課長）



# 病院機能評価受審の効果

信州大学医学部附属病院では、病院機能評価の「症例トレース型ケアプロセス評価」を内部監査の手法として取り入れています。病棟に自ら手を挙げてもらい、内部監査を実施する病棟を決定し、その病棟で1症例を取り上げ、患者の外来～入院～退院までの一連の流れを追いながら、チーム医療の実践を確認します。この方法により、下記のような様々な効果を得ることができました。

## 「見える化」による変化

「自分たちが日頃何気なくやっていることでも、発信しないと外からは何も見えないですね。ケアプロセスでその見えない部分を意識的に見えるようにしたことで、他職種への理解だけでなく、院内全体の中の自分たちの役割についても理解が深まったと思います。」

(医療安全管理者)



「なかなか部署全体、組織全体が変わるとするのは難しいのですが、外から言われることって浸透しやすいんですね。特に、若いスタッフには言えるけど、キャリアがある方には言いにくかったり伝わりにくかったりすることも、外や横から言ってもらえることで変えることができるというのはありがたかったです。」

(療法士)



## 情報の蓄積による高密度なケアの提供

「多くの患者さんを抱えている中で、一人の患者さんに対して回診できる時間は1日にほんのわずかですし、自分一人で把握できる情報には限界があります。でも、療法士、栄養士、薬剤師、看護師…と、皆さんが患者さんと接している時間を合わせたらすごい蓄積になりますよね。そのように他職種と話をすることで多くの情報が得られるようになり、患者さんにもより濃い診療やケアを提供できるようになりました。」

(担当医師)

「多職種が一堂に会す機会をもっと作っていく必要もありませんが、それだけではなく、記録による情報共有の重要性にも気付かされました。他の職種が色々なことを考えて患者さんに関わっていることを知り、記録を書く意識、読む意識が変わりました。」

(看護師長)

「今までは、看護とリハ、医師とリハなど個々でやりとりをしていたのですが、電子カルテにテンプレートを作って、全職種が書き込めるようになり、これまで共有されていなかったことも一目でわかるようになりました。」

(療法士)

## 病院概要

平成27年4月1日現在

病 院 名	国立大学法人 信州大学医学部附属病院	病 院 長	本郷 一博
所 在 地	〒390-8621 長野県松本市旭3-1-1 TEL 0263-37-2737 / FAX 0263-37-3024		
開 設	昭和19年3月	病 床 数	707床
標 榜 科 目	内科(呼吸器・感染症・アレルギー内科、循環器内科、消化器内科、血液内科、腎臓内科、脳神経内科、リウマチ・膠原病内科、糖尿病・内分泌代謝内科)、精神科、小児科、皮膚科、放射線科、外科(消化器外科、移植外科・小児外科、心臓血管外科、呼吸器外科、乳腺・内分泌外科)、整形外科、脳神経外科、特殊歯科・口腔外科、泌尿器科、眼科、耳鼻いんこう科、産科婦人科、麻酔科蘇生科、形成外科、救急科、総合診療科、病理診断科		

## 編集後記

長野県松本市、雄大な北アルプスの麓にその病院がありました。

大学病院というと、「堅苦しい」、「院内の風通しが悪い」というイメージでしたが、インタビューの最中にそのイメージは覆されました。「今できていなくてこれから改善していきたいことはありますか?」と尋ねたところ、一人の若い栄養士さんが心の底から振り絞るように声を挙げ、自分の部署における苦悩を吐露し始めました。

「もうこの場で言っちゃってもいいですか!? 実は…。」

一生懸命訴える彼女に対して、インタビュー中にも関わらずその場にいる全員が熱心に改善策を議論し始めました。組織が大きくなればなるほど、声を上げることが難しく、現場一人ひとりの声は埋もれてしまうのではないかと思っていたため、この光景を目の当たりにして驚きました。一人ひとりの声に丁寧に耳を傾けるその姿は、まさに「心の通い合う透明性の高い医療」であり、そのような組織が増えていくことを切に願った取材でした。

(山内 みなみ)

日本医療機能評価機構 認定病院の改善事例紹介シリーズ  
Vol.3 一般病院2

2015年5月発行

発行：公益財団法人 日本医療機能評価機構  
〒101-0061 東京都千代田区三崎町1丁目4番17号 東洋ビル  
TEL：03-5217-2320(代) / 03-5217-2326(評価事業推進部)  
<http://www.jcqhcc.or.jp>

